

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2013～2016

課題番号：25257003

研究課題名(和文)レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク 自己多面化と空間構想力

研究課題名(英文) Extensive networks of Lebanese and Syrian migrants: Multifaceted self and spatial imagination

研究代表者

黒木 英充 (KUROKI, HIDEMITSU)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：20195580

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 36,000,000円

研究成果の概要(和文)：1世紀以上に及ぶレバノン・シリア移民の顕著な世界的活躍を支えるのは、異文化の社会に対する適応力とネットワーク形成力・拡張力の高さである。移動する自己と親族・友人等との間で、常に複数の社会における財の価値の違い等に関する情報が交換され、様々なビジネスが展開し、時には出身国と現住国の政治にすら大きな影響を及ぼす。そこでは自己の構成要素の複数性(たとえば言語など)、他者との関係構築ツール(帰属する宗教組織のネットワークから信用再強化のためのカネの貸借といった財の交換関係にいたるまで)が意識的に維持・展開される。その歴史的起源はレバノン・シリア地域の非ムスリム商人や通訳といった類型に求められる。

研究成果の概要(英文)：Lebanese and Syrian migrants' conspicuousness in their global activities is supported by their high adaptabilities to the different cultures and by their strong extending networks. They exchange information of different values between their families and friends, who are also in the move, in order to open new businesses and sometimes exert politics of their home and residing countries. Multiplicity of their identity and complexity of their relationship-building tools are always maintained and developed. The historical origin of this behavior can be traced back to non-Muslim merchants and interpreters in Ottoman Lebanon and Syria.

研究分野：中東地域研究

キーワード：移民 シリア レバノン 中東 ラテンアメリカ ディアスポラ イスラーム 東方キリスト教

1. 研究開始当初の背景

本申請の研究代表者は、平成 21(2009)-24(2012)年度に科研費・基盤研究(A)海外学術調査にて「レバノン・シリア移民の創り出す地域 宗派体制・クライエンテリズム・市民社会」を実施し、レバノン、カナダ、フランス、ブラジル、オーストラリア等 13 か国において移民研究機関・宗教組織の訪問や聞き取り調査を行った。それにより同移民が人口規模に比して各移民先社会の中で、突出した政治的・経済的存在感を示していること、19 世紀末-20 世紀初めの移民よりも 20 世紀後半以降の移民の方が、出身地社会との間でより強い政治的・経済的な相互影響関係を有していることを明らかにした。この過程で、世界各地のレバノン・シリア系移民の突出した活動状況を考究するために、決して人種論には拠らない、その文化的・社会的背景とメカニズムを明らかにすべきとの認識に至った。

2. 研究の目的

レバノン・シリア系移民の特徴として拡張的なネットワーク形成力が挙げられることがわかった。これは自己から、親族・宗派・近隣・友人関係などを通して様々な中間的他者を媒介させ、たとえ空間的・社会的に遠距離にあっても、その目的の者に対して自在に関係性を伸ばして到達する能力である。他の移民集団にもある程度見られるが、レバノン・シリア移民の場合、おそらくそこに「自己多面化能力」が強く作用しているのではないかと、この見通しを得た。自己多面化の営みは、中東研究の先達により提唱されてきたところの「アイデンティティ複合」を意識的に発展させ、「異なる自己」を多数準備し、多様な他者との「結合の手」を準備する能力である。本研究は、参加メンバーが世界各地のレバノン・シリア移民の活動実態を観察し、地球大のネットワーク形成の技術とそれが培われる背景とを実証的に解明することを目的とした。これにより、移民がネットワーク拡張を通じていかなる空間を構想するのかを明らかにし、移民による主体的な地域創出の営みを描き出そうとした。

3. 研究の方法

(1) メンバーの現地調査

4 年間に研究分担者、連携研究者、研究協力者が現地調査を行った国は、レバノン、イラン、トルコ、フランス、イギリス、スペイン、アメリカ合衆国、カナダ、メキシコ、エクアドル、コロンビア、ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、チリ、ペルー、オーストラリアの 17 か国に及ぶ。メンバーは各地にてすでに知人等からの紹介により関係を得た、あるいは継続的に関係を維持してきたレ

バノン・シリア系移民・その子孫や、移民団体(レバノン人クラブ等)、宗教施設(モスクのほか、ギリシア正教や马龙派等の東方キリスト諸教会)、大学付設・あるいは独立の移民研究組織(たとえばレバノンのノートルダム大学レバノン移民研究センター等)、移民研究者、移民ビジネス関係者に対してインタビュー調査を実施した。また関連する資料収集を行った。

(2) 移民研究者・作家等の招聘による国際会議の組織

移民の空間構想力は文学作品において先鋭に表れると考えられることから、南北アメリカにおいて活躍するレバノン・シリア系の作家のうち Eduardo Halfon(グアテマラ、米国)、Rawi Hage(カナダ)を、レバノンから移民文学の専門研究者を招聘して講演会、ワークショップ、対談型研究会などを公開で開催した。また最終年度にはレバノン、米国、メキシコ、オーストラリアから第一線のレバノン移民研究者を招聘し、本研究領域の現在の課題と将来の展望を総攬するワークショップを開催した。

(3) 移民の資料映像の発掘と紹介

メキシコのレバノン移民の子孫が所蔵していた 1949 年の一時帰国時の 16 ミリフィルムを発掘して修復・デジタル化のための機関紹介を行い、日本国内とレバノンとで上映会を開催し、映像の中身の検証を行った。

(4) シリア難民という新たな現実への取り組み

本研究期間を通じてシリア内戦は激化の一途をたどり、21 世紀最大の人道問題とされる巨大な難民問題を目の当たりにすることとなった。シリア内戦の総合的な分析に加えて、各地のシリア難民/移民の新たな問題の発生と展開について、調査研究に着手した。

(5) 研究集会等での報告、出版物を通じた発信

学会や研究集会に参加・報告し、定期刊行物を通じて市民に研究成果の還元をするようにした。

4. 研究成果

成果の集成として、メンバー全員の執筆による『レバノン・シリア移民』(全 13 章+エッセイ 10 本)をみず書房より 2017 年に刊行予定である。

レバノン・シリアの地域から世界各地に向けて移民が本格的に始まったのは 19 世紀末であるが、当時の送り出し社会の人口規模は、同時代の日本の鳥取県程度のものであった。その規模の社会から、今日の地球大の移民の顕著な活躍ぶりには、本研究を計画した当初から想定していたところの自己多面化能力の高さと、結合の手の拡張による空間構想力の高さとが確認された。その歴史的な起源を追求した結果、レバノン・シリア地域を含めた旧オスマン帝国領域における人間の移

動性の高さ、多言語使用の環境における媒介者機能の遍在、宗教共同体の越境性（カトリック、正教、ユダヤ教、スンニー派・シーア派のイスラーム）を利用した人間の移動能力と適応力の高さ、複合的社会を所与のものとするがゆえの、地域的距離とモノの価値の差異を利用した商業機会開拓能力、他者との間の信用構築能力が重視される。それらが集約した歴史的な人間類型として「通訳」dragoman が考えられ、その性質を dragomanity と名付けて、国際学会等で提唱し始め、良い反応を得ている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 8 件)

黒木英充・栗田禎子「対談 シリア・難民問題を考える」『経済』, 245, 2016年, 87-104頁, 査読無.

黒木英充「シリア内戦の力学 出口はどこにあるのか」『世界』岩波書店, 876, 2015年, 224-232頁, 査読無.

長沢栄治・栗田禎子・黒木英充「座談会 激動する中東と日本のゆくえ」『世界』岩波書店, 870, 2015年, 226-239頁, 査読無.

飯島みどり「世界で最も無欲な大統領? ホセ・ムヒカ前ウルグアイ大統領インタビュー」『世界』岩波書店, 875, 2015年, 226-235頁, 査読無.

黒木英充「地域を股にかける人々を比較して レバノン・シリア移民研究の地平」宇山智彦(編)『スラブ・ユーラシア研究報告集別冊 比較研究の愉しみ 国立大学附置研究所・センター長会議第3部会シンポジウム報告』2014年, 23-39頁, 査読無.

黒木英充「二つの内戦を超えて シリア内戦の多層構造と「中東」の変容性」『日本中東学会年報』30-2, 2014年, 137-144頁, 査読有.

真島一郎「いのちの翻訳 社会人類学のために」『立命館言語文化研究』26-2, 2014年, 査読有.

飯島みどり(訳)エドゥアルド・ハルフォン「最後のトルコ・コーヒー」『世界』岩波書店, 857, 2014年, 293-302頁, 査読無.

〔学会発表〕(計 13 件)

Hidemitsu Kuroki, "Dragomanity: An Origin of Multifaceted Nature of Lebanese and Syrian Migrants?" Workshop: The

Future of Lebanese and Syrian Migration Studies, 2016.10.24, Tokyo University of Foreign Studies (Tokyo, Fuchu-shi).

Akimitsu Ikeda, "Money as Worldview: From Fieldwork in Alberta, Canada," Workshop: The Future of Lebanese and Syrian Migration Studies, 2016.10.24, Tokyo University of Foreign Studies (Tokyo, Fuchu-shi).

黒木英充「レバノン-メキシコ-日本コネクション “Lebanon 1949” 復活の背景」中東映画研究会「Lebanon 1949」, 2016.5.30, 東京大学福武ホール(東京都・文京区)

真島一郎「アフリカに根はあったのか 東アジアの視界から」シンポジウム: 越境とリミックスの世界文学, 2016.3.8, 日本女子大学(東京都・文京区).

黒木英充「近現代の歴史的シリアにおける人間移動と少数派」東京大学中東地域研究センター公開シンポジウム: 移動・移民と中東, 2016.1.30, 東京大学駒場キャンパス(東京都・目黒区).

飯塚正人「アラブ諸国におけるイスラム主義運動の動向」日本イスラム協会講演会, 2015.6.13, 東京大学本郷キャンパス(東京都・文京区).

Hidemitsu Kuroki, "Armenians in Mid-19th Century Aleppo," Symposium: Armenians of Syria, 2015.5.25, Haigazian University, Beirut (Lebanon).

Hidemitsu Kuroki, "An Inevitable Wave?: Syrian (and Lebanese) Migrants to Europe in Historical Context," Symposium: Middle Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian Viewpoints, 2015.12.9, Hokkaido University (Hokkaido, Sapporo).

黒木英充, 「レバノン・ディアスポラ(移民)の意図せざる拡散と戦略的な拡張」第63回武蔵大学公開講座<ディアスポラ>から見る世界 移動する人、広がる文化, 2015.10.17, 武蔵大学(東京都・練馬区).

黒木英充「シリア内戦の奈落の底から」AA 研創立50周年記念シンポジウム, 2014.10.24, 如水会館(東京都・千代田区).

Hidemitsu Kuroki, "Sectarian Kaleidoscope of Aleppo (1813-1850)," Symposium: Sectarianism in Modern Middle East, 2014.4.11, Rice University, Houston (USA).

Hidemitsu Kuroki, "Muslim and Christian Migrants in Mid-19th-Century Aleppo," Research Meeting: Human Mobility and Multi-ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies, 2014.2.26, Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut (Lebanon).

黒木英充「シリア危機の背景」UNHCR 主催シンポジウム：シリア危機：日本の人道的役割 いま私たちにできること, 2013.8.3, 国連大学(東京都・渋谷区)

〔図書〕(計 8 件)

黒木英充(編)『レバノン・シリア移民』みすず書房 2017 年刊行予定, 352 頁.

黒木英充「レバノン・シリア移民の拡散とネットワーク」永原陽子(編)『人々がつなぐ世界史』MINERVA 世界史叢書第 4 巻, ミネルヴァ書房, 2017 年刊行予定.

黒木英充「シリア 内戦と多民族・多宗派問題」後藤晃・長沢栄治(編)『現代中東を読み解く アラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店, 2016 年, 152-176 頁.

ジェフリー・レッサー『ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の構築 「ブラジル人らしさ」をめぐる葛藤と模索』鈴木茂・佐々木剛二(訳), 明石書店, 2016 年, 393 頁.

Hidemitsu Kuroki (ed.), *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 1: Tehran, Aleppo, Istanbul, and Beirut*, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2015, 192 pp.

鈴木茂「「黒い積荷」の往還 奴隷貿易から見る大西洋世界」歴史学研究会(編)『史料から考える世界史 20 講』岩波書店, 2014 年, 75-83 頁.

黒木英充(編)『シリア・レバノンを知るための 64 章』明石書店, 2013 年, 426 頁.

黒木英充「アラブ移民 その長い歴史と世界的な活躍」松本弘(編)『現代アラブを知るための 56 章』明石書店, 2013 年, 47-51 頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:

権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

・ホームページ等
レバノン・シリア移民調査から
<http://migrants.aa-ken.jp/lebanon.html>

・国際研究集会の組織

Workshop "The Future of Lebanese and Syrian Migration Studies," 2016.10.24, Tokyo University of Foreign Studies (Tokyo, Fuchu-shi).

Film Screening Meeting "Lebanon 1949: Newborn State on Film," 2016.3.22, Metropolis Empire Sofil (Beirut, Lebanon).

Lecture Meeting: Paul du Quenoy "Orientalism at the Russian Consulate in Beirut?: Konstantin Petkovich's Lebanon and the Lebanese (1885)," 2015.10.16, 千代田区立日比谷図書文化館(東京都・千代田区).

Working discussion with Rawi Hage "Multifaceted Self and Spatial Imagination," 2014.10.17, 如水会館(東京都・千代田区).

Workshop "Multifaceted Self and Spatial Imagination Observed in Lebanese and Syrian Migrant Literature," 2014.3.27, Tokyo University of Foreign Studies (Tokyo, Fuchu-shi).

・資料映像の発掘とデジタル化支援

"Lebanon 1949" メキシコ・シティー在住レバノン系人 Mme. Aida Houry 所蔵 1949 年レバノン・シリア・ヨルダン・パレスチナ撮影 16 ミリフィルム(49 分, サイレント).

6. 研究組織

- (1)研究代表者
黒木 英充 (KUROKI, Hidemitsu)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号： 2 0 1 9 5 5 8 0
- (2)研究分担者
飯塚 正人 (IIZUKA, Masato)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号： 9 0 2 4 2 0 7 3
- (3)研究分担者
鈴木 茂 (SUZUKI, Shigeru)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号： 1 0 1 6 2 9 5 0
- (4)研究分担者
真島 一郎 (MAJIMA, Ichiro)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号： 1 0 2 5 1 5 6 3
- (5)連携研究者
飯島 みどり (IIJIMA, Midori)
立教大学・異文化コミュニケーション学部・准教授
研究者番号： 2 0 2 5 2 1 2 4
- (6)連携研究者
鵜戸 聡 (UDO, Satoshi)
鹿児島大学・法文学部・准教授
研究者番号： 7 0 7 1 3 9 8 1
- (7)研究協力者
池田 昭光 (IKEDA, Akimitsu)
- (8)研究協力者
大場 樹精 (OOBA, Kodama)
- (9)研究協力者
山本 薫 (YAMAMOTO, Kaoru)